

第3章 帝国製麻琴似亜麻工場の歴史

「麻生町」という地名の由来となった亜麻工場は、どんな工場だったのでしょうか。

【北海道で2番目の亜麻工場】

明治時代になると、北海道では、森林や原野を切り開いて畑や家、道などを作る開拓が進められました。こうして新たに切り開かれた土地では、北海道の気候にあった農作物が育てられるようになりました。



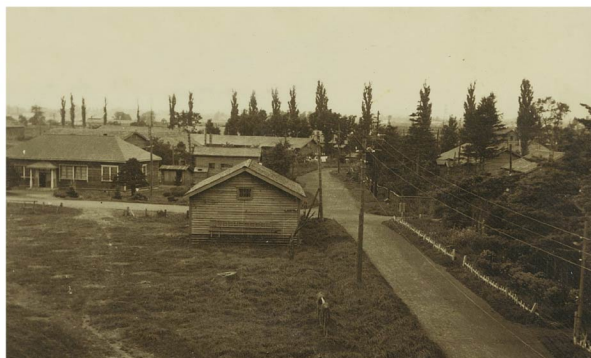
その中の一つに、すずしい気候でよく育つ「亜麻」がありました。北海道のすずしい気候を生かして亜麻を育て、そのくきからせんいを取り出して糸や布製品を作ること、北海道に新しい産業※をおこすことができると考えられたのです。

こうして、1887（明治 20）年、北海道で亜麻に関する仕事を行うための
会社が作られました。1890（明治 23）年 6 月には、札幌郡琴似村新琴似（現
在の札幌市北区麻生町）で、この会社によって北海道製麻琴似製線所の建設が
始まり、翌 1891（明治 24）年 8 月に完成して作業を始めました。

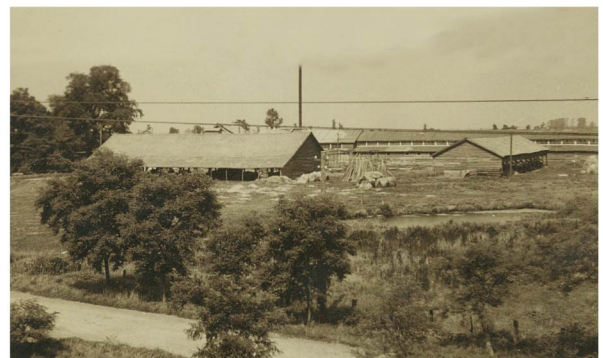
これは、亜麻のくきからせんいを取り出す仕事をする工場で、北海道で
2 番目にできた亜麻工場でした。この工場は、後に帝国製麻琴似亜麻工場
と名前を変え、1957（昭和 32）年 10 月に閉鎖されるまで 66 年間作業が
続けられました。



▲工場^{ちゅうしんぶ}の中心部^{ようす}の様子



▲工場^{ちゅうしんぶ}の中心部から南の方角を見た様子



▲工場内^{そうこ}の倉庫の様子

? むずかしいことば

※産業 人間の生活に必要な物^{ひつよう もの}を作り出す、いろいろな仕事。

【亜麻工場の仕事】

亜麻は、工場との約束に基づいて農家が栽培しました。収穫後に工場に運びこまれた亜麻のくきは、小分けに束ねられ、池や土の中に作られたタンクで水に浸します。これは、くきのせんいを取り囲んでいる部分を水の中でくさらせることによって分解し、せんいを取り出しやすくするためです。



▲亜麻の収穫の様子

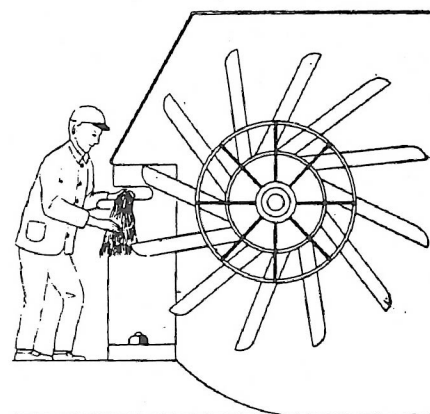


▲くきを水に浸している様子



▲水に浸したくきを乾燥させている様子

次に、水に浸したくきを乾燥させ、機械を使ってせんいを取り出します。機械でくさいせんいを取り出しやすい状態にしたくきを手に持ち、「ムーラン」という機械の回転する羽根にぶつけ、せんいを取り囲んでいる部分をたたき落としてせんいを取り出しました。

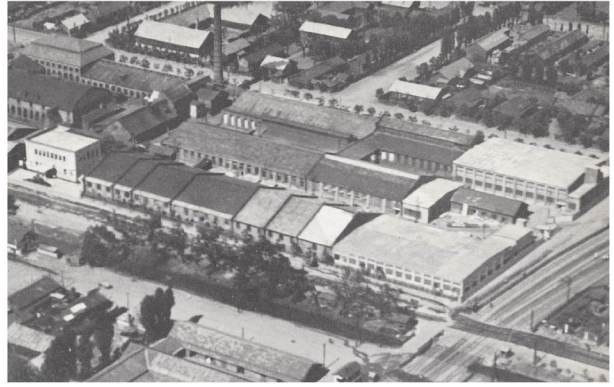


▲「ムーラン」の絵

(出典) 原松次著

「北海道における亜麻事業の歴史」

亜麻工場の仕事はここまでで、取り
出されたせんいは現在の札幌市東区北
7条東1丁目のあたりにあった製品工
場（帝国製麻札幌工場）に運ばれ、糸
や布製品に加工されて全国に出荷され
ました。



▲帝国製麻札幌工場
（出典）「帝国製麻株式会社三十年史」巻頭頁

【亜麻工場の生活】

琴似亜麻工場のしき地は、全体で約 28 ヘクタール（札幌ドーム約 5 個分）
の広さがありました。工場のしき地内には、仕事をするための建物のほかに、
工場で働く人たち（従業員）
やその家族の住む家（従業員
住宅）や、日用品を売ってい
る店、浴場（ふろ場）、保育所、
神社（マコト神社）などがあ
り、工場で働く人たちとその
家族の生活の場にもなってい
ました。



▲工場の 60 周年を記念して 1950（昭和 25）年
に撮影された従業員とその家族の集合写真

両親が琴似亜麻工場で働いていた大波和美さん（1940（昭和 15）年生まれ、
札幌市北区在住）が工場内の住宅で暮らしていた子ども時代の思い出を話して
くれました。

「工場内の住宅は、5軒一続きの長
 屋※で、近くに住む人とは親しく暮
 らしていました。行事もたくさん
 あって、6月には工場内にあったグ
 ラウンドで工場で働く人たちとその



▲工場の思い出を話す大波和美さん

家族の運動会が行われていました。8月にはみんなで石狩浜へ海水浴に行き
 ました。秋には演芸会が開かれ、工場の中でも芸が上手な人たちが歌や劇を
 見せてくれました。生活に必要なものは工場に何でもそろっていました。」



▼▲工場内に建てられていた住宅



▲工場内のグラウンドで行われていた運動会



▶工場内にあったマコト神社



？ むずかしいことば

※長屋 たてもの 細長い建物をいくつか区切ってそれぞれ一軒として住めるようにした家。

しょうわ 1950(昭和25)年ころの琴似亜麻工場



・イラスト作成：札幌市立大学デザイン学部2年 佐野弥詩さん・佐野萌夏さん

あさひがちょう 今の麻生町

